

『陳十四夫人伝』に唱われた地獄

廣田 律子

『歴史と民俗』14号で、中国浙江省で伝承されている、鼓詞をはじめ、陳靖姑を題材とする諸芸能の現状と、鼓詞上演の目的、場、儀礼、そして説唱される『陳十四夫人伝』のあらすじを紹介した。女神の活躍を唱う『陳十四夫人伝』は、観衆であり信者である女性の嗜好に配慮し、女神陳靖姑の名を借りて、聞き手の女性に種々な処世訓を授ける内容である。人々の心を引く地獄巡りが取り入れられ、信者の日常生活に密着させて、現世の罪と死後の罰を説いた地獄が説明される。

中国で伝承されている地獄巡りの話の中で、民衆に広く知られているのはやはり『目連救母』の話であろう。目連の地獄巡りは古くから唱われ、唐の中期、八世紀半ばに盛んに仏事に際して絵解きをしながらか唱われたとされる変文にも、『目連変文』が存在する。⁽¹⁾ 変文は明・清代に宝巻に受け継がれ、⁽²⁾ 現代の目連劇に至る。⁽³⁾ この目連の地獄巡りは、陳靖姑の地獄巡りに多大な影響を与えていると考える。

また他にも観音の本縁を語る『香山宝卷』⁽⁴⁾の地獄巡りも、観音と陳靖姑を一体化して見ようとする信仰から、当然影響を及ぼしていると考ええる。地獄の解説をする、地獄經典の勧善書などからの知識も反映されているだろう。⁽⁵⁾

地獄巡りが、『陳十四夫人伝』にどのようなに取り入れられているか、目連劇等の地獄巡りの内容と比較する必要がある。そこで今回はまず資料として、陳靖姑がお産のために死んだ珠翠の魂をつれもどすために地獄を巡る場面、第二冊第十二段から十三段、そして十四段の頭までを翻訳・紹介しようと考ええる。テキストは、『陳十四夫人伝』(陳靖姑地方神研究会資料之二『夫人詞』日本民俗研究会・上海民俗学会等合編、一九九五年、所収)を用いる。

註

- (1) 王重民編『敦煌變文集』人民文学出版社、一九五九
- (2) 『目連三世宝卷』宣統元年 蘇城瑪瑙經房刊本等
- (3) 福建省の莆仙戯の『目連救母』等各地に伝承されている。
- (4) 澤田瑞穂『宝卷の研究』国書刊行会、一九七五、一二六頁に『香山宝卷』のあらすじが記されている。
- (5) 『玉曆至宝鈔』(『珍本善書福寿宝蔵』所収、上海大衆書局)を参考にした。

第十二段 冥土の地府(地獄)を巡る

急いで冥土の地獄に行つて、席香地獄につく。

「監靈官(冥土の役人の名称)さん、この人たちはどういうわけでここににいるのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘（陳靖姑の尊称）の知らないことをきかせてあげよう。席香地獄は第一の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、生きているうちに端の折れた線香を焚くこと勿れ。端の折れた線香を焚くことは罪になって、来世に夫婦は長持ちできない。前世に端の折れた線香を焚けば、現世で夫婦は途中で別れる。女は男の焚いた線香を受け取るべからず、男は女の焼香を邪魔すること勿れ。焼香する時に話をすれば、香炉は汚れた声に汚染される。仏さまは俗世の邪氣を受けず、万遍の焼香をしても功德にはならない。線香をまつすぐに香炉に挿してこそ、線香の煙がそよそよと天上界に通じる。線香を斜めに香炉に挿せば、故意でなくても徒に焼香したことになる。火籠（青銅の籠の蓋をした火鉢）はもとから足を暖めるもので、火籠の中で線香を点けること勿れ。かまどの灰取り口はもとから灰のたまるところで、かまどの灰取り口で線香を点けること勿れ」

神娘はこの話をきくと、ぶんぶん怒って監靈官に尋ねた。

「監靈官さん、わたしはあなたにおききしたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「俗世の男女が線香を点ける時に、ここで点けてはいけない、あそこで点けてもいけないとは……。まさか香炉に挿された線香が自ら燃えるはずもないのに」

「このことについて、神娘は詰問しなくてもいい。この冥土で答えられる。」

俗世の男女に勧めたいことは、真心で仏を拝み、焼香すること。仏さまは仏の灯で線香を点すことを喜び、こよりで線香を点すことが神に歓迎される。お湯でなら顔をきれいに洗えるが、冷たい水で洗えば真心を現わせない。手拭いで手を拭いて仏さまの前に出るのに、汚い布で手を拭いて線香や灯を点すこと勿れ。かまどのたき口でズボンの裾をまくること勿れ、かまどの神を怒らせるから。かまどの中で桃や李の木を焼くこと勿れ、家が不運になるから。銅の鍋をかまどに一夜おいたままにすると、家にさわぎが起きる。包丁を鍋の蓋の上においたままにすると、かまどの

神は夜に休めない。木のしゃもじで鍋の蓋を敲けば、かまどの菩薩に咎められる。毎月一日、十五日に鍋を削るのと勿れ、諸々の仏、神を怒らせるから。一日、十五日に包丁を研ぐこと勿れ、その日には諸々の神、仏が俗世に下りてくるから。天上界の神、仏は俗世に下りて、凡人が生き物を殺すことを不快に思う。精進料理に養魚の水を使うこと勿れ、肉食の鍋で精進のスープを煮ること勿れ。男は女の着物を着ること勿れ、女は男の風呂場に入ること勿れ。北向きに寝ること勿れ、北向きに寝ると元気を損う。毎年八月三日は、かまどの菩薩の誕生日だ。全家族が一日精進すれば、一年四季花盛りのように平安吉祥になる」

神娘はこれが道理にかなうと思い、書き留めておくように舍利（ここでは徳行の高い和尚を指す）に頼む。これを俗世に持つて行って人々にきかせよう。

席香の地獄を通ると、祭壇の前で布施の金銀を分つ。香を焚くのに紙銭を十重ねたものを焼き、席香地獄で金銀を撒く。監靈官は礼金を受け取って、冥土の道の路銀にする。（ここで紙銭を燃やす）

急いで冥土の地獄に行つて、仏灯地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいいのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。仏灯地獄は第二の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、生きているあいだに仏の前の灯を吹くこと勿れ。仏の灯を吹けば大罪を犯したことになる、他日臨終に罪になる。十殿の閻魔王は裁きの時に、来世に口の歪んだ人になるように罰する。どうしても口が歪んだかときくと、前世に仏前の灯を吹いたからとされる」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて俗人に勧めるようにいい付ける。仏灯地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

急いで冥土の地獄に行つて、鋪銭地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さっそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。鋪銭地獄は第三の地獄にある。」

俗世の男女に勧めたいのは、焼いた紙銭をかき回すこと勿れ。紙銭をかき回すと使えなくなり、冥土でも金がなければ困る。他日臨終の百二十日のうちに、冥土の百鬼は小銭をねだる」

神娘はこれをきくと、機嫌が悪くなって、監靈官に尋ねた。

「監靈官さんにおきしますが、俗世ではあらゆることにお金がかかりますが、まさか冥土でもそんなことがあるなんて」

「俗世と冥土はもとより同じだ」

「冥土の百鬼も小銭をねだるのですか。お金がそんなに大切なのですか」

「神娘のご存知の通り、金があれば鬼にひき白をひかせることさえできるのだ。（地獄の沙汰も金次第）」

「俗世の焼いた紙銭や銀錠（錫箔製の元宝銀形のもの）は冥土の百鬼を騙すぐらいのもので、まさかそんなお金が通用するなんて……」

「神娘は詰問しなくていい、冥土でもお金を払う必要があるのだ。俗世の男女に勧めたいのは、紙銭や銀錠は立てて焼くように（燃えやすいように）。焼けて穴のあいた紙銭は、冥土で銅銭になる。焼いた紙銭の灰を集めて、水中に捨てる。俗世の紙銭の灰を水に捨てれば冥土で鋪銭の関所を通ることは免れる。君が紙銭の灰を大切にすれば、冥土の百鬼はお金がもらえる」

神娘はこれが道理にかなうと思って、書き留めて凡人に勧めるようにいい付ける。鋪銭地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

急いで冥土の地獄に行つて、対経地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さっそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。対経地獄は第四の地獄にある。俗世の男女に勧めたいのは、精進して読経を学ぶことだ。よく知っているお経⁽¹⁾を多く読経し、よく知らないお経はあまり読経しない。俗世で読みまちがうことはかまわないが、死後冥土では罪になる。他日臨終の百二十日に十殿の門前で読経を照合される。照合でまちがいがなければ、来世に精進する人間になれる。ただし一字でもまちがったら、冥土に落とされて罰せられる。来世にばかり者になつてしまう。秤がわからず、数も知らず、ぼんやりして、世に生まれたかいない。どうして痴呆になつたかという、前世で読経にまちがいがあつたからだ」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて凡人に勧めるようにいい付けた。対経地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。(ここで紙銭を燃やす)

急いで冥土の地獄に行つて、香台地獄に着く。遠望すれば香台の高さは万丈で、近くから見ても万丈の高さだ。香台の番をする童子はお香を点して、香台を見る神娘を迎える。神娘が雲に乗つて香台に上がると、福建の福州の町が見えた。昔から俗世と冥土は一枚の紙の隔たりという。そこからは陳の家の家族も見える。父の陳元猷は、背中の腫れ物で苦しんでいて可哀相だ。以前観音仏の像を敲いたせいで、背中の腫れ物で六年苦しむと運命にさだめられている。母の葛氏は、昼夜娘のことを気にかけている。お母さん、心配しないで。私は平陽、泉州を通つて家に帰るといいたい。林氏の姉は独り寂しく部屋にこもっている。彼女の誓いの罪が夫に当たつて、彼女は六年寡婦暮らしをするように罰せられる。次兄陳法清は、ぶらぶらして仕事がない。王氏の姉は兄の法清を責めているように見える。家中の人々をはつきり見ると、雲や霧に乗つて香台から下りる。香台地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。

(ここで紙銭を燃やす)

急いで冥土の地獄に行つて、鎔舌地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。鎔舌地獄は第五の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、悪人と交際せず、仲良の人と仲たがいすること勿れ。人に善行を勧めれば最後に益になり、告げ口をすれば罪は重い。こちらの話をあちらに告げ口し、あちらの話をこちらに告げ口する。その両方が大いに喧嘩すると、自分はその間でアハハと笑う。人を仲直りさせるようなことをする人は、上座に着かされて、酒を捧げられる。もし、人の酒を飲みながら与太を飛ばしたり、仲を裂くことをする者がいれば、その舌はバネの矢のようになって、まわりの人を射殺するだろう。俗世で君がわがままに事をはこぶなら、死後に冥土で閻魔王に会はずだ。君の舌が七寸ほど引き延ばされて、また人を傷つけるのかときかれるだろう。君を俗世に生まれ変わらせる折に、啞になるように罰せられる。悪いことをすれば、いつかは悪い報いがあるものだと言の人はいい、よいことをすれば、いつかはよい報いがあるものだと言の人はいい。善悪の報いがないということ勿れ、その時になると、必ず報いがある。どうして啞になったかときくと、前世に告げ口をしたからだと言われる。心根の優しい人には、神さまから福を賜り、木の根が堅固となりいつまでも茂る」

神娘はこれが道理にかなうと思って、書き留めて凡人に勧めるようにいい付ける。鎔舌地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

急いで冥土の地獄に行つて、爛河地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。爛河地獄は第六の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、頬紅は少なく、お香は多く買うように。好いお香は金炉の中で焚かれ、頬紅や白粉は水に流されてしまう。修行し仏を拝み長く精進すれば、冥土の百鬼は精進する女の世話をする。修行せず悪事をはたらけば、死後冥土で刀や槍で罰せられる。冥土には六つの橋があり、そこを通る者は六種類にわけられる。金橋や銀橋は仏さまの通る橋で、鋼橋や鉄橋は修行する

人の通る橋だ。石橋や木橋は悪人の通る橋で、橋の長さが千丈、高さは万丈だ。橋の広さは三寸三分で、牛頭、馬面の鬼が橋の端で見張っている。橋の両端にある生漆の木は人の体に塗られ、橋の中間にある沸いた油は人の体にかけてられる。悪人がこの橋を通ろうとすると、牛頭、馬面は銅のさすまたをチャリンチャリンと持ち上げて、悪人を火の燃えている穴に落とす。助けを求めて叫ぶ人が橋の下にいるが、銅の蛇、鉄のすっぽんがその魂や体を丸呑みにして、三世も家禽⁽²⁾になるように罰する。どうして家禽になったのかときけば、前世で悪人だったからだ。修行する人が橋を渡ろうとすると、一本の大道が天上界に通じる。男が修行すれば役人になり、女が修行すれば貴婦人になる（鳳凰の冠をかぶる）。よく修行した三番目のお姫さまは、いろいろの難儀を凌いで天上界に上がる。十八羅漢は男の役で、観音は女だ。俗世の男女に勧めたいことは、よく紡績を行うことだ。俗世で麻のひもや綿の糸を布施すれば、冥土で汚い泥濘の瀬を通ることから免れる」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて凡人に勧めるようにいい付ける。爛河地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

急いで冥土の地獄に行つて、鉄遙地獄に着く。

「監靈官さん、ここにどうして大勢の人がいるのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。鉄遙地獄は第六の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、皆自分の親に孝行すべきだ。父を天として、母を地として、天地の父母がそろつて子を生む。天地がなければ人間はなく、父母がいなければ君もない。親は苦勞がないということ勿れ、十カ月の妊娠は苦しいことだ。母の血から化した乳を三年ほど与え、いつも母の着物は蹴られたりする。子どもが病氣にならないように大変な世話をし、子どものことで驚かされたり、慌てたりする。授乳は血を流すが如く、寝小便のために母はよく眠れない。ベッドに寝ている子どもの泣き声がきこえるなり、母は駆け足で見に行く。両足で踏板を踏みながら、指で着物を解いて乳を飲ませる。子どもが道

端でころんで倒れば、母はすぐにご飯の碗をおいてかけつける。さつと子どもをだき起こして、可愛い子ね、とんだめる。心配しながら成人まで育てると、結納の贈り物を用意して縁談を頼む。嫁をとると、息子は変わり、親の苦勞を忘れてしまう。親のいうことはどこ吹く風で、嫁の一言の重さは泰山にもまさる。親が入口でころんで倒れれば、どうしてよく見ないのかと責める。老人のくどい話を嫌がり、白虎はなぜ山に帰らないかと嗤う。⁽³⁾親の生きているうちに孝行せず、死後に魂の幡を並べる必要があるうか。何遍も泣いたり、いく枚かの紙銭を焼いたりして何遍も拝んだり、香炉にお香を焚いたりする。泣くのは生きている人たちの目を遮るためだが、どうして閻魔王を欺瞞することができるものか。男は父母に孝行するべきで、女は舅姑に孝行すべきだ。目下の者はいずれ目上になり、子どもはいずれ親になる。軒先からしずくはぼたぼたとたれ、堂上の親を敬うべきだ。千両の銀でも実子を買えず、万両の金でも生みの親を買えない。千年の門前の山はあるが、百年の舅姑はいない。目上の者に孝行すれば自らに福があり、勤勉に田を耕せば倉いっぱいの豊作がある。親や他の人を白眼視すれば、死後冥土に落ちて罪になる。冥土にいる一対の大鳥は、もっぱら俗人の白眼を突く。生まれ変わる来世に、俗世の白眼、横目の人となる。どうして横目の人になったかときくと、前世に親を横目で見たからだ」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて凡人に勧めるようにいい付けた。鉄遙地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。(ここで紙銭を燃やす)

急いで冥土の地獄に行つて、滑油地獄に着く。

「監靈官さん、ここにどうして大勢の人がいるのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。滑油地獄は第七の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、油のついた手を水で洗うこと勿れ。凡人が油のついた手を水で洗い落とすと、油が冥土の滑油地獄(滑油監)にたまふ。他日臨終の百二十日のうちに、冥土で滑油地獄を通らなければならない」

神娘はこれをきくと、ぶんぶん怒って、監靈官に詰問する。

「監靈官さん、わたしはあなたにおききしたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「俗世で油を水で洗うことでも、冥土で罪とされるのですか」

「神娘、そうだ、罪になる」

「それなら、俗世の女が油や白粉を塗ったり、俗世の男が肉を売ったり、料理をしたりするのに、油で汚れた指を舌先できれいなめなければならぬのですか」

「神娘よ、詰問しなくてもいい。冥土でこのことが答えられる。俗世の男女に勧めたいのは、粗末な紙を用意せよということだ。油で汚れた手を紙で拭いてから、その紙を火の中に捨てる。油の煙は火に払われて、冥土で滑油地獄を通ることを免れる。三日と七日には白粉をつけず、一日と十五日には油を塗る勿れ」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて凡人に勧めるように舍利（和尚）にいい付けた。滑油地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

急いで冥土の地獄に行つて、茶牢地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどうしてここに居るのか、さつそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。茶牢地獄は第八の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、茶の葉を地面に捨てること勿れ。茶の葉を地面に捨てる」と冥土で茶牢地獄を通らなければならない」

神娘はこのことをきくと立腹して、監靈官に尋ねた。

「監靈官さんにおききしたいことがあります」

「神娘は何をわたしにききたいのか」

「俗世で茶の葉を地面に捨てたら罪になるのですか」

「罪になる」

「それなら、わたしが俗世に帰ったら、礼儀のきまりを変えなければなりません。客がきたら、客にきいてからお茶を入れたり、さらに茶の葉を飲んで食べるならお茶をだすが、そうでなければ、お茶は飲ませないともいうのでしょうか」

「神娘、そんな道理はない」

「あなたは茶の葉を地面に捨てると、死後冥土で罪になるといいました。もしお茶を飲む時、茶の葉を食べなかったら、どうなるのですか」

「神娘はこのことを問い詰めなくてもいい。これについては、冥土で答えられる。俗世の男女に勧めたいのは、家にざるやこわれたかめの破片があつたら、その中にお茶の葉を捨てて、ついでに水中に流せばよい。俗世で茶の葉を水に流せば、冥土で茶牢地獄を通ることを免れる。茶の葉が宝物ではないということ勿れ。今日、わたしはその理由を教えてあげよう。穀雨（二十四節氣の一つ）までに休まず茶の葉を摘む。昼は山で茶の葉を摘み、夜は夜明けまで茶を揉む。三枚の茶の葉は一杯のお茶になり、神さま、仏さまにお香や灯を捧げてお礼をする。万歳の君王がお茶を飲めば、機嫌がよくなって国をよく治める。皇后がお茶を飲めば、元気になって君王のお相手をつとめる。文武の百官がお茶を飲めば、渴きをいやして国を守る。読書人の青年がお茶を飲めば、頭が冴えて文章を書く。お嬢さんがお茶を飲めば、閨房で着物の刺繍をする。店の番頭がお茶を飲めば、気持ちがさっぱりして勘定をする。田を耕す農夫がお茶を飲めば、田畑や山の仕事がよくはかどる。三十六行（各種職業の総称）の人たちは皆お茶を飲むが、茶の葉を炉に入れて着物を乾かすこと勿れ。茶の葉は俗世の宝物だから、炉の中や地面に捨てること勿れ。俗世の男女はこの二つのことに気をつければ、冥土で茶牢地獄を通ることを免れる」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて凡人に勧めるようにいい付ける。茶牢地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を燃やして金銀を分つ。(ここで紙銭を燃やす)

第十三段 立腹して血河のかめをひつくり返す

急いで冥土の地獄に行つて、刀山地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここに居るのか、さつそく教えて下さい」

「神娘の知らないことをさかせてあげよう。刀山地獄は第九の地獄だ。俗世の男女に勧めたいのは、生きているあいだに牛肉を食べること勿れ。可哀相な牛の肉を食べたら、冥土で鉄釘の山に登らなければならない。耕作用の牛は苦勞がないという勿れ、今日その長短をいわせてもらいたい。立春、啓蟄が過ぎると、耕作用の牛は毎日野良で働く。

前に曲がつた軛を背中にかけられ、後に鉄の犁を引いている。叱られたり、罵られたりしても進まず、竹枝の束で敲かれながら向きをかえる。竹枝の束でひどく敲かれて、この畜生めと罵られる。主人は昼食のため家に帰つて、軛を解いた牛を田に放す。耕作用の牛は飢餓に耐えず、くい柱から脱け出して盗み食ひする。わずかな稲や麦を食うと、この畜生めと罵られながら敲かれる。臨終の百二十日のうちに、耕作用の牛は荒れ野に埋葬されなければならない。

耕作用の牛を埋葬せず、牛の首を刎ねる人に売り払う。牛を殺す者は惨い心で、なわや斧を持つ。足にわら靴を履き、身に短い着物を着て、前掛けをつける。斧を三回牛の頭にあてて、耕作用の牛は涙がとめどなく流れる。白い刀をさしこみ、赤くなった刀を引きだして、牛の四本の足を町に運んでいく。半斤を八両で小売りして、大蒜、牛肉や大根と一緒に炒める。可哀相な牛は考えながら、頭を背負つて冥土に行く。訴えにきたのは他の人でなく、俺は俗世に苦勞した牛だ。生まれてから人間の養育がいらす、青山の草だけを食つてきた。皆は俺の踏んだ耕地の米を食べている

が、どうして牛の首を刎ねる人に売り払うだろうか。牛の角は用途がないということ勿れ、櫛に作って髪を梳ることができる。牛の毛は用途がないということ勿れ、ラシャ帽に作って頭を掩うことができる。牛の皮は用途がないということ勿れ、太鼓に作ってドンドンと響く。牛の骨は用途がないということ勿れ、耕地に骨粉を使ったら豊作になる。牛の筋は用途がないということ勿れ、綿打ちの者にとっては一番手頃なものだ。牛の尾を捨てること勿れ、塗装師にとっては得難いものだ。牛の糞は用途がないということ勿れ、熱を冷ます補助薬とされる。牛小屋の泥は用途がないということ勿れ、麦の栽培によい肥料になる。話せば牛の全身はすべて宝物で、牛の首を刎ねる人に売り払うべきではない。半斤を八両で小売りして、牛や馬を殺す人は刀山に登るはずだ。豚や羊を殺してもいいが、牛や馬を殺す罪は軽くない」

神娘はこれが道理にかなうと思って、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにといい付ける。刀山地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。(ここで紙銭を燃やす)

冥土の地獄の道を急いで、孟婆地獄⁽⁵⁾に着く。孟婆は神娘の到来を見かけると、一碗の孟婆湯を捧げる。神娘は孟婆湯を受け取り、監靈官は慌てる。監靈官は急いで前へ進んで、その碗を奪い取って地面に投げる。法のある神娘は機嫌が悪くなって、あまりに無茶だと監靈官を咎める。

「わたしは孟婆の茶で渴きを癒したいのに、茶碗を奪い取って地面に投げてはだめよ」

「絶対にこの湯を飲んではいけない」と監靈官は神娘にいう。

「冥土の水を三杯飲んでもかまわないが、一碗の孟婆湯は飲んではいけない。この湯はほかでもない冥土の有名な孟婆湯だ。神娘がこの湯を飲めば、俗世で法事をするができなくなる。東西南北も分らず、ぼんやりと日を送る」
神娘はこれをきくと、ぶんぶん怒って、監靈官にいう。

「監靈官さん、おききしたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「冥土のこの湯はそんなにひどいもののですか」

「ひどいとも」

「わたしは今日孟婆地獄を通る時に、おかげさまで孟婆湯を飲まずにすみましたが、俗世の老若男女がここを通る時、あなたはいつも、ここでわたしにしたようにするような、そんなに時間がありませんか」

「神娘は詰問しなくてもいい。この難儀についても、冥土で解決できる。俗世の男女に勧めたいのは、親に孝行することだ。老人の臨終に、茶の葉や白銀を用意する。茶の葉や銀をその口に入れておけば、親は死後にも頭が冴える。子どもが孝行すれば、その子孫は出世する」

神娘はこれが道理にかなうと思って、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにといい付ける。孟婆地獄を通ってから、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

冥土の地獄の道を急いで、斬手地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さっそく教えて下さい」

「神娘の知らないことを教えてあげよう。斬手地獄は第十層にある。俗世の男女に勧めたいのは、俗世で助産婦になること勿れ。助産することは好いことといわれるが、冥土では斬手の関所を通らなければならない」

神娘はこれをきくと、ぶんぶん怒って、監靈官に尋ねた。

「監靈官さん、おききしたいことがあります」

「神娘は何を知りたいのか」

「俗世の助産婦は冥土で手が斬られるといわれましたね」

「斬られるのだ」

「それなら、わたしが俗世に帰ったら、きまりを変えて、大きくなった娘たちに助産を学ばせましょう。彼女たちが結婚、妊娠して出産の時、皆自分で助産するようになるでしょう。まさか冥土で天下の女の両手をすべて斬ってしまうことはないでしょうか」

「神娘の知らないことがある。もとより助産のことで手が斬られるはずはない」

「それなら、どうして手を斬るのですか」

「どの家でも、誰でも、子どもが授かったら喜ぶだろう。三日目に、いけにえの供え物で天地にお礼をする。助産婦も祝いに来て、何かをやりたくて、胞衣を持ったり臍の緒を切ったりした両手でお香や灯を点けることを手伝ったために、諸々の神、仏さまに対して不敬なことになるので、死後に手が斬られる」

「助産婦は斬手地獄から逃れることができないのですね」

「神娘の知りたいたいことを話してあげよう。実は、この難儀も冥土で免れることができる」

「どのようにするのか、教えて下さい」

「助産婦は臨終の百二十日のうちに、線香包みの赤紙で作った筒⁽⁶⁾を十本の指にかぶせておく。斬手の関所を通る際に、冥土の役人は『お前は俗世でどんな仕事をしていたか』ときくから、助産婦は『わたしは助産婦だった』と答える。

『そんなら手を出して、斬ってやる』といわれたら、助産婦が手を伸ばして指にかぶせた赤紙の筒を抜けば、この関所を通ることができる」

「監靈官さん、この男たちも、手がひっぱられて斬られそうで、まさか彼らが助産したことなどないでしょうに」

「あの男たちは豚を殺す者だ」

「監靈官さん、さきほど、刀山地獄であなたは豚や羊を殺すことを人に任せるといったではありませんか。どうして豚を殺す人も手が斬られるのですか。それなら俗世で大きくなった豚を今日も明日も棒で敲いたりして殺せばいいの

ですか」

「神娘の知らないことがある。豚を殺す者はもとより手を斬られるはずがない」

「なぜ手が斬られるのですか」

「俗世の人が豚を飼うには、毎日しゃもじで飼料をやつて、屠殺に適する大きさになると、良い日を選んで、天地の諸々の仏さまに祀つてお礼をする。豚を殺す者は豚の尿や糞に触ったり、豚の毛を削り取ったり、豚の胃腸を弄んだりする。彼らはさらに何かしたくて、供え物を並べる机の上にあるお香や灯が消えそうになるのを見ると、前掛けを提げてお香を取りに行く。それで三十三天の諸神諸仏に対して不敬なことになるので、死後に手が斬られることになる」

「では、豚を殺す者はこの斬手地獄から逃れることはできないのですね」

「神娘の知りたいことを教えてあげよう。実はこの関所を越えることもできる」

「どんな方法か、教えて下さい」

「豚を殺す者は臨終の百二十日のうちに、線香包みの赤紙で作った筒を十本の指にかぶせておく。斬手の関所を通る時に、冥土の役人が『お前は俗世でどんな仕事をしていたか』ときくので、豚を殺す者は『わたしは豚を殺す者だった』と答える。『それなら手を出して、斬つてやる』といわれたら、豚を殺す者は手を伸ばして指にかぶせた赤紙の筒を抜けば、この関所を通ることができる」

神娘はこれも道理にかなうと思つて、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにいい付ける。斬手地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

冥土の地獄の道を急いで、田螺地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいいのか、さっそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。田螺地獄は第十一層にある。俗世の男女に勧めたいのは、生きているうちに田螺の肉を食べること勿れ。田螺を食べることは罪になり、他日臨終に地獄に落とされる。田螺は九十九の子を生むが、母を入れても百にしかない。田螺が子を生むのは辛いことで、昼夜の区別なく水中で苦しんでいる。大風や大波がなければ、田畑のそばに生きていく。もし大風や大波にあえば、肉と殻は一緒に海に流されてしまう。田螺はもとより鴨の食べ物で、俗人はどうしてそれを奪い取ろうか。田螺は作物を食わず、もっぱら田畑のそばで泥を食う。田螺を一つ食べたらずで三回敲かれ、多く食べたらず、もつと多く敲かれる。三三が九回棒で頭を敲かれて、まぬけになるほど敲かれる。来世に生まれ変わる際に、毒の腫れ物がたくさんできる。どうして毒の腫れ物ができたかときくと、前世に田螺の肉を食べたせいだ。男が田螺の肉を食べないことは、方岩⁽⁸⁾（地名）で胡公（方岩山の仏）を拜むに等しい。女が田螺の肉を食べないことは、南海の普陀に詣でることと同じだ」

神娘はこれが道理にかなうと思って、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにといい付ける。田螺地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

冥土の地獄の道を急いで、解鋸地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここににいるのか、さつそく教えて下さい」

「神娘の知らないことを教えてあげよう。解鋸地獄は冥土の地獄にある。俗世の男女に勧めたいのは、媒酌するにも本分を守るべきだ。媒酌するのはよいことだといわれるが、死後冥土で罪になる。死後臨終の百二十日のうちに、媒酌人は鋸で真つ二つにされてしまう」

神娘はこれをきくと、ぶんぶん怒って、監靈官に尋ねる。

「監靈官さん、お尋ねしたいことがあります」

「神娘は何を知りたいのか」

「俗世で媒酌すると罪になるのですね」

「罪になる」

「では、わたしが俗世に戻ったら、きまりを変えましょう。俗世の男女が大きくなっても媒酌人を頼んではいけないのなら、男は『俺の嫁になってもらえるか』と女にきき、女は『あなたに嫁ぎたいけれど、いかがでしょうか』ときくように」

「そんな道理があろうか」

「媒酌をすれば罪になるなら、誰がそんなことをやりたがるでしょうか」

「神娘は詰問しなくてもいい、冥土にその答えがある。俗世の男女にきいてもらいたいのは、昔から俗世に媒酌ということがある、空に雲がなければ雨が降らないように、地上に媒酌がなければ縁組になりにくい。初婚の媒酌はすべきただが、生きているうちに再婚の媒酌をしてはいけない。再婚の媒酌は罪になり、夫婦を別れさせることは罪になる。妻を娶れば後継がほしくなり、穀物を積んで飢えに備えるように老後に備える。先夫が悪く、継夫が良いと、良い具合に一緒に暮らす。先夫が良く、継夫が悪いと、考えれば涙を飲む。夢中で苦情をいい、媒酌人は実に人を傷つけると怨む。媒酌人は媒酌人の話をもって、夫婦が別れるように騙す」

神娘はこれも道理にかなうと思って、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにとい付ける。解鋸地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。（ここで紙銭を燃やす）

冥土の地獄の道を急いで、碓磨地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さっそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。碓磨地獄は冥土の地獄にある。俗世の男女に勧めたいのは、子どもが大きくなったら本を読ませることだ。外の仕事をしてかまわれないが、訴状を書くには気をつけないといけない。訴

状を書けば銀を多くもらえんというが、死後の冥土で罪になる。筆の先で人を突き殺しても命の償いをせず、俗世の多くの人を傷つけた。十枚の訴状の九枚は嘘で、正確に判断できる清廉な役人はいるだろうか。もし銀を十分に払ったら、道理のない訴訟でも勝てる。もし銀を払えないなら、道理のある訴訟でも負ける。他日臨終の百二十日のうちに、碓磨に挽かれて粉々になってしまう。来世に生まれ変わる際に、ぐにやぐにやした者になる。どうしてこんなにぐにやぐにやした者⁽⁹⁾になつたかときくと、前世で訴状を書いて良民を傷つけたせいだ」

神娘はこれが道理にかなうと思って、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにといい付ける。碓磨地獄を過ぎると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。(ここで紙銭を燃やす)

冥土の地獄の道を急いで、鴛鴦地獄に着く。

「監靈官さん、この人たちはどういうわけでここにいるのか、さっそくきかせて下さい」

「神娘の知らないことをきかせてあげよう。鴛鴦地獄は冥土の地獄にある。俗世の男女に勧めたいのは、親が娘を育てて嫁にやることだ。縁組して一家をなし、理由もなく再婚すれば罪になる。女は何回も再婚すると、十殿の前で責められる」

神娘はこれをきくと、ぶんぶん怒って、監靈官に尋ねる。

「監靈官さん、おききしたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「俗世の女が再婚すると罪になるといいましたね」

「罪になるのだ」

「それなら、俗世の女が夫をなくし、子どもをかかえて、家に財産もなく、助けてくれる近親者もなければ、どうやって暮らしていくのでしょうか。冥土は、すべての夫婦がともに白髪になるまで添い遂げることを保証できるので

か」

「神娘、運命によつて再婚した一部分の女にとっては、死後の冥土で男たちがいい争い騒ぐことをしなければ、それでいい。しかし、食ふことだけが好きで、怠け者で仕事嫌いで、享樂に耽るような女もいる。先夫に嫁いたら先夫と喧嘩をし、継夫に嫁いたら継夫と喧嘩をする。菜園の門を出入りするようにならねばならぬ。死後の冥土で彼女の夫たちは十中八九いい争い騒ぐ。先夫は『このあまめ、お前を長い間探したぞ。さあ、俺について帰れ』といい、継夫は『でたらめをいうな』⁽¹⁰⁾。俗世で俺は媒酌人に頼み、お金を払つて彼女を買ひ入れたのだ。お前についていくとは天ほど大きい笑い話だ』という。先夫はさらに『俗世で若いころからの夫婦だ。媒酌人に頼み、結納を贈り、赤いかごで迎えたのだから、どうしても俺について帰るはずだ』という。一人は女をひっぱつて行こうとし、もう一人は女をしつかりつかんで離さない。この女自身も惑つて、やむを得ず、先夫に『あなたは俗世で稼ぎが少なくて、わたしによい暮らしをさせられなかった。今、わたしを継夫について行かせないなら、わたしは今日薪を盗み、明日米を盗み、田螺の殻のように何もなくなるまで彼の家を盗んでから、あなたについて行こう。どうだ』。継夫は『このあまの良心は本当に好い』という。この女はさらに向きをかえて、継夫に『彼を騙しているんだ。それとも、あなたは私を先夫のところに暫く行かせて、今日油を盗み、明日塩を盗み、田螺の殻のように何もなくなるまで彼の家を盗んでから、あなたのところに行こう。どうだ』。先夫、継夫とも、一人はしつかりつかみ、もう一人はひっぱつて行こうとして、すこしも譲らない。十殿閻魔王はこの場面を見ると、思い切つて、牛頭、馬面を呼び寄せていい付ける。『この婦人は俗世で食ふことだけが好きで、怠け者で仕事嫌いで、巧みな話で何人かの男を傷つけた。今日、冥土の十殿の前でさへ騒いだりしている。今、俺の命令によつて、このあまめを庭の柱に縛つて、鋸で二つに分けてから、彼らに分け与えよう』。十殿閻魔王の命令を牛頭、馬面ははつきりときく。ぐいとひとつかみで彼女を庭の柱に縛りつけて、鋸を彼女の頭におく。鋸の齒がまだ切らないうちに、もうぎやあぎやあと叫び続ける。二、三回鋸がひかれ

ると、彼女は全身血まみれになる。この様子を見て、先夫は彼女をもらいたくなくなり、継夫は逃げ出す。来世に生まれ変わる際に、皆、尼と和尚になる。俗世の男女に勧めたいのは、夫婦が仲良く暮らすことだ。夫は妻の不美人を嫌うこと勿れ、妻は夫の家の貧しさを嫌うこと勿れ。柔らかい肉に骨を足し、肋肉に豚の頭の肉を足す。花と花は対になり、破れた帯も破れた袴に似合う。美貌が好きで道楽すること勿れ、美貌が百年もつことがあるうか。夫婦の因縁は前世に決められたもので、運命によって夫婦になる。夫が外から帰ってくれば、お茶やタバコを出して世話をする。よいことをするように夫に勧めれば、朝廷の役人になるよりも幸せだ。運命により手に入れるべきものは、いつかは手に入るのだから、運命によつて手に入らないものを争うこと勿れ。閻魔王がお前に八合の米の運命と決めたのであれば、お前が一升に足すことは難しい。仲良く暮しを立てず、騒いだり、罵りあつたりすれば誰も安心できない。夫婦は二枚の扉のようなもので、楽に開けたり閉めたりするのは両方に頼る。夫と妻は尊重しあうべきで、家のことをよく相談すべきだ。夫婦が罵りあつたことを冗談としてあしらつたら、次の世も夫婦になることはない。氣立てがやさしいなら、神さまは福を賜り、木が根をしつかりおろすように、神さまは必ず賢い人を庇護する」

神娘はこれが道理にかなうと思つて、書き留めて俗世の人たちに勧めるようにといい付ける。鴛鴦地獄を通ると、祭壇の前で紙銭を焼いて金銀を分つ。(ここで紙銭を燃やす)

冥土の地獄の道を急いで、円満血河に着く。

「監靈官さん、前方に洋々たる赤い水が見え、婦人たちは皆髪をみだしている。彼女たちは赤い水の中に坐り、なぜこんなひどい目に遭わされているのですか」

「陳神娘、神娘の知らないことをきかせてあげよう。血河地獄は地獄にある。俗世の男女に勧めたいのは、川の上流で血染めの着物を洗うこと勿れ。血染めの着物を池で洗えば、池の仙女に対して不敬なことになる。血染めの着物を水たまりで洗えば、水たまりの仙女に対して不敬なことになる。血染めの着物を谷川で洗えば、東海のお竜王に対し

て不敬なことになる」

神娘はこの話をきくと、ぶんぶん怒って、監靈官に尋ねる。

「監靈官さん、おききしたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「俗世の女が、血染めの着物をここで洗ってはいけない、あそこで洗ってもいけないなら、まさか一枚一枚の血染めの着物を汚れたまま放っておけというのですか」

「神娘は詰問しなくてもいい、このことは冥土で解決できる。俗世の男女に勧めたいのは、桶やたらいを用意しておくことだ。人跡稀なところから水を担いできて、家の陰で血染めの着物を洗え。血染めの着物をきれいに洗って、よく絞ったら、みだりに干してはいけない。血染めの着物を屋外で干すなら、太陽と月の神に対して不敬なことになる。血染めの着物を軒の下で干すなら、家の主人に対して不敬なことになる。血染めの着物を家の隅に干して、太陽に見られず、太陽の神に不敬になる勿れ。血で汚れた水を軒の下に流せば、家の水がめの神に対して不敬なことになる。血で汚れた水を便所の中に流せば、田畑の五穀の神に対して不敬なことになる。血で汚れた水を屋外の空き地⁽¹¹⁾に流せば、地蔵王に対して不敬なことになる」

神娘はこの話をきくと、ぶんぶん怒って、監靈官に尋ねる。

「監靈官さん、おききしたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「女は血染めの着物を洗った血の水をここで流してはいけない、あそこで流してもいけないといわれましたね。まさか血の水を大きなかめに入れておいて、産後の百二十日がたつと、渴きを癒す時に、今日一膳、明日また一膳、一膳一膳で飲んでしまうのではないでしょうね」

「神娘、このことが答えられる。家からちよつと離れたところの便所のそばは諸神、諸仏の通らないところで、安心して血の水を流したらいい。俗世の婦人に勧めたいのは、俗世の父母は娘を育てることだ。十二、三歳で化粧をさせ、十七、八歳になると嫁入りさせる。嫁入りはめでたいことといわれるが、生みの母の死後の難儀は知られていない。他日臨終の百二十日のうちに、冥土で血河缸（血河の中のかめ）に坐ることになる」

神娘はこの話をきくと、ぷんぷん怒って、監靈官に尋ねる。

「監靈官さん、おききたいことがあります」

「神娘は何をききたいのか」

「俗世の女はお産をすれば、死後の冥土で血河缸の中に坐らなければならないとおっしゃいましたね」

「はい、神娘、それはそうだ」

「それなら、わたしは俗世に帰って、そのきまりを変えよう。男は大きくなっても嫁をとらず、女は大きくなっても嫁に行かない。俗世の人たちは死なず、冥土に行くこともない。そうすると、俗世にはいつまでもそれだけの人間、冥土にはいつまでもそれだけの鬼がいて、冥土に仕える鬼さえ足りなくなるでしょう」

「神娘、どうしてそんな道理があらうか」

「監靈官さん、俗世には男女雌雄がいれば、お産ということは必ずある。このことを厳しく禁止できましようか。なぜお産をする女は死後に血河缸の中に坐らなければならないのか」

「神娘は詰問しなくてもいい、冥土でこのことが解決できる。俗世の男女に勧めたいのは、血盆の精進⁽¹²⁾をして生みの母を保護せよ。三年六カ月の精進をし、血盆経⁽¹³⁾を万遍唱えれば、父母を天上界へ済度できる。もし血盆の精進をしたくないなら、種々のことを忌み避けてもいい。日が山から昇ってくるのを見ず、日が山に沈んでいくのを見ない。ドラや太鼓の音が鳴り響くのをきかず、太鼓打ちや彩色旗で見栄を張ることをしない。鉢、鏡、物差しを用いず、秤の

棹を手にしな。赤い花や赤い帽子を用いず、赤い着物を着ない。赤い靴下や赤い靴を履かず、赤いベッドや赤い布団を使わない。赤い机や赤い腰掛けに坐らず、赤いスープや赤飯を食べない。赤い碗や赤い箸を使わず、いろいろのものを忌む。三年六カ月忌み避けると、血盆経を万遍唱えることに相当する。息子と娘が種々な忌を行えば、父母を天上界へ済度できる」

神娘はこの話をきくと、氣を揉んで、監靈官に尋ねる。

「監靈官さん、お尋ねしたいことがあります」

「神娘は何が知りたいのか」

「こんなに多くの忌があつては、俗世の人たちはどうしてこれらをよく守れるでしょうか」

「陳神娘、これらの忌はたしかに避けがたい。だから、俗世に孝行な子が少ない」

「それなら俗世の女に死後の冥土で血河缸の中に坐らない者がいるでしょうか」

「罪の多い者はその中に長く坐り、罪の少ない者は短く坐り、その中に坐らない者はない。誰がそんなに厳しく忌を守れるだろうか」

神娘はこの話を聞くと、思わず自分の母が死後にも血河缸の中に坐る難儀に遭うだろうと思つて悲しくなる。ずいぶん苦しいだろう、お母さま、あなたは娘を生んでから、どれだけの難儀を忍んだだろう、臨終にも血河缸に坐らなければならぬ。わたしは廬山の法を持っている。わたしは血河をひっくりかえして母を守ろう。神娘は天をひっくりかえす呪文（翻天呪）を唱えて、上を下への大騒ぎを起こす。翻天王よ、覆地王よ、冥土で勝手に血河缸をひっくりかえす。監靈官はこの仕業を見るなり、慌てて、跪いて神娘に願う。

「血河缸をひっくりかえしてはいけない。陳神娘、昔、血河缸は三百六十あつた、血河缸の水はあふれていた。目連は母を救うために冥土に来て、三百五十の血河缸を敲きこわした。今日、神娘はさらに三つのかめをひっくりかえし

て、七つだけを残して悪人を処罰する。昔、血の水はかめの中に坐る人の頭まで浸したが、今、その中に坐れば腰まで浸す。神娘がもしさらにかめをひっくりかえすと、冥土では、悪人を処罰できなくなる」

神娘は勝手に血河缸をひっくりかえし、怒ってしたこと、天の禁令を犯した。冥土の閻魔王はこの事情がわかると、天上に昇って玉皇さまに上奏する。福州の陳十四は、廬山で学んだ法で良民を救う。平陽の珠翠のために、彼女は冥土で勝手に血河缸をひっくりかえした。三つの血河缸をひっくりかえしたので、彼女の罪を決めるように玉皇さまにお願いをする。玉皇はこの上奏をきくと機嫌が悪くなり、寿命の名簿をよく見る。彼女の俗世の寿命は三十六歳だが、父を三回罵ったので三歳減らしてある。天地をひっくりかえした罪で三歳減らし、勝手に血河缸をひっくりかえした罪で、さらに三歳減らす。全部で九年の寿命を減らして、二十七歳に天上に昇る。

家の主人は杯を挙げて酒を三回捧げ……神娘は祭壇の前で献納金を受け取る。神娘は受け取ったお金を冥土の鬼に撒いて、冥土で寿命が減らされたが、平安を保つ。南天で寿命が減らされたことはさておき、さらに十四が冥土にいることを語ろう。祭壇の御座に着かせられた神娘は、慈悲靈験を現わして良民を護る。

第十四段 家に帰って父親を助ける

神娘は神鞭をちよつと振って、珠翠の魂をつれていく。神娘は魂を閻魔王の宮殿までつれて、十殿の閻魔王の方々に謁見する。閻魔王は神娘の顔に免じて、珠翠の魂を冥土から放す。

「神娘がお前を助ける労が大きく、お前の寿命を三十歳増やしてやる。俗世へ復活させてやるから、これから改心して好い人になれ。善事を多く行い、悪事をする事勿れ」

十殿の閻魔王は手を振って、神娘は珠翠の魂をつれて俗世に帰る。

訳者註

- (1) 熟的経巻：常に読経し、憶えやすいようなお経を指す。例えば「心経」「蓮花経」「大悲呪」「高王経」など民間でよく読経するお経。
- (2) 扁毛：扁平な羽毛のある動物、例えば鶏、鴨などの家禽。
- (3) 老人を罵る言葉。どうして早く死なないかという意味。
- (4) 牛拌：牛小屋の泥が肥料にされる。
- (5) 孟婆：冥土の神。彼女は冥土で駆忘台を築き、孟婆湯を作る。孟婆湯は甘、苦、酸、塩からい、辛、の五つの味に分ける。すべての生まれ変わる者はこの湯を飲まなければならない。飲んだら前世や冥土のことを忘れてしまう。
- (6) 紅紙香筒：線香を巻いた赤紙の包みを香筒という。
- (7) この句の田螺精は妖怪という意味ではなく、田螺の肉をたくさん食べることを指す。
- (8) 方岩：永康県にある。胡公は方岩山の仏、浙江省の西南地方で崇拜される。
- (9) 軟癰食爛：非常にぐにやぐにやになって、すなわちひどい軟骨病にかかる。
- (10) 称更弄好：君は言いたいことを言ってもいいが、でたらめを言うなという意味。貶すような言葉。
- (11) 空基壇：作物もなく、建築物もない屋外の空き地。
- (12) 血盆素：一種の精進の名称。
- (13) 血盆経：一種のお経の名称。